

平成州紙



おりおりの記

剣友

救急ヘリ病院ネットワーク
会長

國松 孝次

私は、大学は一応「法学部卒業」ということになっているが、なにせ、超低空飛行の成績だったので、あまり大きな声で言えたものではない。

それに比べると、部活動としてやっていた剣道のほうは、真面目に稽古に励んだ自負があり、「剣道部卒業」とは、胸を張って言えると思っている。

大学在学中、一生懸命にやったのは剣道だけというのは、自慢にもならない話だが、今、自分の人生を振り返ってみると、剣道から受けた恵みの如何に多いことか。

私の人間形成は、多くの畏敬し心を許し合える「剣友」との交誼を抜きにして語ることはできない。また、警察庁長官時代、不覚の銃撃を受け、日本医大病院の救急医の名手術により奇跡的に命を助けられたが、3発ぐらいのピストルの弾にはへこたれない体力も剣道が与えてくれたものである。

私は、この事件を通じて救急医療とのご縁ができ、「ドクターヘリ」の普及活動を行うNPO法人「救急ヘリ病院ネットワーク」の運営に携わることになった。

ドクターヘリというのは、ヘリコプターに搭乗して救急現場に急行した医師達の迅速な治療により、患者の救命率を飛躍的に向上させることができるという優れたものなのだが、わが国では、なかなか普及が進まず、このNPO法人の運営にも、

常に財政難が付きまとい苦労してきた。

そこへ、我々の仕事の公益性を高く評価して、援助の手を差し伸べてくれたのが、私の時



の剣道部の主将であり「剣友」のひとりである張富士夫君（前トヨタ自動車名誉会長）である。彼は、経団連のなかに「ドクターヘリ普及促進懇談会」という支援組織を立ち上げ、企業からの寄付を促す仕組みを作ってくれたのである。

おかげで、我々の普及活動は順調に進むようになり、ドクターヘリは、今では、42の道府県に51機が配備されるに至り、全国的なネットワークがほぼ完成、多くの人命が救助されている。

先般は、タレントの笑福亭笑瓶さんが、ゴルフのプレー中、急性大動脈解離の発作に襲われ、ドクターヘリの出動により危うく生命をとりとめた事案があった。

「剣友」の有難みを噛みしめながら、ドクターヘリの更なる発展を目指す活動に取り組んでいる。